釣り

蔵旗鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
釣り

【Ｎコード】
Ｎ５０２４Ｙ

【作者名】
蔵旗鈴

【あらすじ】
文才なしが書いた山なし谷なしショートショート

（前書き）

ひっっっっさしぶりですね、本当に。
最後に投稿した日からだいぶ月日が経ちましたね……（そうでもないけど）。
小説にはまったく成長が見られませんけどね。
つまらないことは保証しますよ。

「腹減ったな……」
「昨日の夕飯の釜飯美味かったなあ……」
「飯の話すんじゃねーよ。余計に腹が減るだろ。それにしてもあれだな。まったく釣れんな」
「まったく、まったく釣れんな」

釣竿の先をボケっと眺めながら小林（こりん）がつぶやくと、それを反芻（はんすう）するように五反田（ごたんだ）が返した。半日もボートに揺られ続けたせいか、双方共に死んだ魚のような目をしている。
潮風に吹きさらされて乾燥した唇を舐めながら五反田は手首を動かした。その時、それまでたるんでいた釣り糸がピンと張った。くすんだ色をしていた五反田の目に光が戻った。呆けた面でゆらゆらと揺れる釣り糸の先を追っている小林の肩を叩き、顔を自分の方へと向けさせた。

「手応えがあったぞ」
「嘘つけ。何秒何十分何時間もまったく釣れんのに、今ここでお前の竿にかかっただと？　あり得るわけがなかろうが」

支離滅裂な事をほざきながら睨みつける小林を無視して五反田は釣竿を引いた。だが、予想に反して竿は大きくしなった。
五反田は眉間に皺を寄せ、舌打ちした。何かが針を引いているようには思えなかった。

「ちくしょう、根掛かりだよ。これで何回目だ」
「それみろ、お前が俺より先に釣れるわけがないんだ」
「もう針のストックねえしなあ……」

「どんだけ根掛かりしてんだよ」
五反田は水に手を入れた。水は思ったよりも冷たくなかった。
「仕方ない。潜って針取ってくる」
「冷えるぞ」
「服の下に海パンはいてきといてよかったよ」
「お前ちょいちょい無視するよな俺のこと」
「お、獺（かわうそ）」
「どこ？」

ライフジャケットと服を全て脱いで海パン一枚になった五反田が海面下を指差した。
小林がボートから乗り出して海の中を覗き込むと、銀色の気泡を纏った黒い生き物が泳ぎ去って行くのが見えた。

「あ、本当だ。珍しいもん見たな」
「臆病な獺が人間の近くに姿を見せることなんて滅多にないのに」
「なあ、獺が河童（かっぱ）や狢（むじな）の正体だって話知ってるか。狢っちゅーのは狸や狐と並んで人間を化かす生き物だって言われてるんだがよ、これの正体が獺だって話だ」
「今日獺を見たのはこれで２０回目だ」
「えっ、お前何時の間にそんなに見てたんだよ、言えよ俺に」
「そろそろ針取ってくるわ」
「お前そんなに俺のこと無視して恨みでもあんのなにか」

五反田は流すように小林を無視して海に飛び込んだ。水飛沫（みずしぶき）が上がり、波紋が海面に広がると、透き通っていた海底が一瞬歪み見えなくなった。小林は顔についた海水をタオルで拭った。
歪んだ海面が収まりしばらくするとぶくぶくと泡が浮かんできて、

五反田がぶはあ、と顔を出し、握った右手を小林に突き出した。手には釣り針を持っている。

「針取れたよ。やっぱり根掛かりだった」
「お前今勢い余って俺のこと殴ったんだけどどう思うんだよ」
「引っ張りあげてくれ」
「いや謝罪しろよ」
「はやくしてくれ、結構冷たいんだ」
「いや……もういいや」

小林はため息をつきながら左手で五反田の手首を掴み、一気にボートの上へと引き上げた。

「なんだってんだよまったく」

悪態をつきながら水が滴る五反田にタオルを投げつける。
それで体を拭きながら、意外そうな顔で五反田が口を開いた。

「お前、案外力持ちなんだな」
「今更何を言うかね」
「やべえ、海水飲んだら気持ち悪くなった」
「吐くなよボートの中で」

五反田はボートから乗り出し、うっ、と小さく喉を鳴らすと、胃の内容物を吐き出した。

「おどどどどどど」
「もういっそ全部吐いちまえよ」
「おどどどどどど」

かなりの量があるのか、何度も喉を鳴らしては吐いた。

「うええ……昨日食った魚全部吐いちまった……」
「釣りに行くのに魚食ってたのかよお前」
「仕方ないだろ。それしか食うもんないんだから」
「いやあるだろ他にも」
「何もなかったんだよ」
「ないだろ流石にそれは。あっ、今会話できてる普通に」
「お前何言ってんだ？」
「なんかすごい久しぶりな気がする普通の会話が」
「そりゃ良かったな」
「いやお前が俺のこと無視してばっかだからさあ……吐いたのが気分転換になったか」
「知らん、さっき食い過ぎたせいかも知れん」
「何食ったんだよ何時の間に……あ」
「なんだよ」
「お前尻から何か生えてるぞ」
「しまった」

（後書き）

STAFF

著　蔵旗鈴（くらはたれい）

編集　詠矢空希喪毛尾和痕化四手瑠奈（よめやそらきもうおわこんかしてるな）

発行　無限会社　低胃蒸（ひくいむし）

発売　同上

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5024y/

釣り

2011年11月17日19時57分発行